奨学生 OB・OG の活動報告

スス・タトンさん　1995～1997年度奨学生 ミャンマー出身／筑波大学 博士課程修了

長年勤められた国連を本年2月に退職され、諸外国との繋がりを更に強化するイニシアティブとして、**番組「WEEKENDS WITH SUSU THATUN」を立上げられました。**毎週、政治経済をはじめ各界の要人を招き、ススさんが直接インタビューするテレビ・配信番組で、高視聴率だそうです。今回、メールにてお話を伺いました。

ススさんは、初めて住んだ日本で幼い娘を育てながら、博士号を取得されました。卒業後、より好条件を示した英国企業ではなく、「祖国の役に立ちたい」というかねてからの志で、国連への就職を選ばれました。

国連では国連開発計画（UNDP）やユニセフにて児童の人身売買などの人道問題に取組まれ、直近ではミャンマーの UNDP の上級アドバイザーとして活動されました。

番組について

A.　ミャンマーで最初のバイリンガルトークショーとして、2020年3月から番組を始めました。番組の目的は「大臣、外交官、国内・国際機関のトップといった重要な意思決定に携わる人たちが、それぞれの意見を安全に共有できるプラットフォームを提供し、ミャンマーと国際社会との相互理解をさらに深めよう」ということです。社会活動家、学術界、実務家のみなさんなどが幅広く参加し、民主的選挙、教育改革、性暴力、ヘイトスピーチ、社会の一体性など諸課題について議論しています。

▲駐ミャンマー丸山市郎日本大使へのインタビュー

（左）番組公式サイト
（右）YouTube チャンネル
どちらからも番組を
ご覧いただけます（全編英語）

番組の手応え

この番組によるイニシアティブは、期待どおりの成果を上げているとお考えでしょうか？また、国連での長年のご経験と成果との比較においてはいかがお考えでいらっしゃいますか？

A.　多くの知識や数々の視点が交流できる場として、このイニシアチブは確実に支持を広げつつあります。すでに沢山のフィードバックが、国際社会だけでなく一般の人々からも寄せられ、とても心強く思います。

この番組では、私はどこかの組織を代表してではなく、私個人として各界の要人や意思決定者とお話できるのが特筆すべき点かと思います。そのため、ミャンマーの民主化や、国際社会との関係性について、非常に突っ込んだ話題や鋭い質問を、何の制約もなく、ゲストに率直に投げかけることができています。

紛争から平和、独裁制から民主主義への転換において、国連の貢献は引き続き重要なものとなっています。その国連に身を置き、同時にミャンマーの実情を身をもって体験し、国内外に多くの信頼を築いてきた身としては、より独立した立場でしがらみにまみれることなく、より簡潔明瞭な貢献ができると思っています。

奨学生のみなさんへ

A.　奨学生の頃を思い出すと、とても　温かく喜びと希望に満ちた想いに包まれます。子育てをしながら博士課程で研究するという生活でしたから、奨学金は大変ありがたいものでした。家族の一員のように愛情をもって接していただいたおかげで、ともすると殺伐としがちな学生生活がほっと温かくなったものです。坂口財団は、多様な国籍を持つ奨学生の交流の場をもつことにより、より良い未来をつくる一員としての自覚を育んでくれたと思います。

ミャンマーは多くの困難と闘ってきました。根強い貧困との闘い、そして内紛との闘い。50 年以上にわたりさまざまなタイプの権威主義的体制の下に置かれ、多様性を認めない偏狭なナショナリズムに苦しんできました。厳しい現実のために、ミャンマーは国際社会からまともな扱いを受けられず、国際社会の中において敬意ある位置づけすら得ることができませんでした。

私はミャンマーの未来に貢献したいという大志を持ち続けてきました。志の実現を可能にしたのは坂口財団の支援によるものが大きかったと思っております。不正や不平等との闘い…その一歩一歩は小さくとも、確実に前進していることに、心から感謝しております。

坂口財団奨学生のみなさん、お一人おひとりがいかに恵まれているか、もうお分かりかと思います。みなさんの将来が輝かしいものでありますよう、心より願っております。どうぞ良いお年をお迎えくださいますように。